

宇野 彰(編著)

高次神経機能障害の臨床 実践入門

前川喜平

(東京慈恵会医科大学名誉教授)

最近、高次神経機能障害、高次脳機能障害の用語が盛んに使用されている。小児神経領域では、広義にはIQ70以上、狭義にはIQ85以上の小児にみられる高次脳機能障害と定義されている。先天性書字困難症、先天性読字困難症、先天性計算障害などと共に、広範性脳機能障害に基づく自閉症、Asperger 症候などがこれに属する。小児神経を専門としている私にとって、成人神経学の知識で如何に発達障害を理解するか、成人神経学と小児神経学を如何にドッキングさせるかは私の長年の夢であった。

局在診断(Being)、神経症候学(平山恵造)、ベッドサイドの神経の診方等で成人神経学を勉強した私にとって本書のタイトルは非常に魅力的である。成人神経学と小児神経学の最大の相違は、成人神経学は完成された神経組織の障害に基づくものであるのに対し、小児神経学は発達途上の障害に基づく点である。胎生期から完成されるまでの障害の時期・程度・範囲により多様な症状を呈するのが特徴である。成人神経学の基礎である局在診断の知識はあまり役に立たず、脳障害の概念で理解せざるを得ないのが現状である。

本書は小児から老人まで、診断からリハビリテーション・福祉まで高次神経機能障害の臨床を広範囲に

わたり簡潔に、理解しやすいように見開き4頁にまとめられているのが特徴である。さらに同じ概念では論じられない小児の学習障害、自閉症、AD/HDを加え小児から成人までとしたのは斬新な試みといえる。小児神経の立場よりするとこの種の教科書に小児を加えていただいたことに感謝している。お互いの理解が深まりわが国の小児神経学がさらに発展するからである。

本書の内容を紹介する。高次神経機能障害を来す疾患で始まり、失語症・失語失行などの言語機能障害とリハビリテーション、観念失行と観念運動失行・構成障害・記憶障害などの行為・認知機能障害とリハビリテーション、学習障害・自閉症・AD/HDなどの小児の高次神経機能障害、高次神経機能障害と画像診断、高次神経機能障害の地域リハビリテーション、高次神経機能障害者の福祉、最後は小脳の高次機能・読み書きの認知モデル・健常脳における高次機能などのトピックスで終わっている。正に題名どおり、いろいろの種類の高次神経機能障害を理解するのに最適の教科書といえる。また本書の知識をもって小児の発達障害を理解するのに有用な知識も豊富に存在している。本書を医師、言語聴覚士、作業療法士、理学療法士、臨床心理士などの高次神経機能障害者・児と関係しているすべての職種の人々と学生の教科書として推薦する次第である。最高の執筆者で構成され、価格も手頃であることを付け加えておく。

●B5判 頁134 2002

定価(本体3,500円+税)

新興医学出版社・刊